

和服の意識に関する調査研究

第1報 和服と洋服の嗜好の関連性について

井 尻 登喜子

(武庫川女子大学家政学部被服学科)

Studies on Image of Japanese Kimono.

Part I: Relation between Likings-tendency of Japanese Kimono and The Western Senses for Clothes.

Tokiko Ijiri

Department of Clothing Science

Mukogawa Women's University, Nisinomiya 663

The Kimono is, nowadays, worn by few people except for ceremonial opportunities, although it is even now highly appreciated as the national costume for the Japanese. In contrast to the case of men, women still meet a variety of chances to wear the Kimono, e. g., on the coming-of-age ceremony and other formal parties.

Such a situation motivated us to investigate young women's senses concerned with new type of Kimonos (New-Kimono) that can be worn in daily life. By this investigation, following trends were observed: (1) the image of the Kimono generally arouses young women's interest in a favorable manner; (2) as a detailed example, a long-sleeved Kimono (Furisode) preferred by them is as such that differing from the traditional one in its colors, namely, that having plain colors characterized by the romanticism which has prevailed during the Taisho era, and (3) these observations imply that, among these people, there exists a trend to make their choice for Kimonos according to the Western senses for clothes.

まえがき

和服は民族的な伝統衣服として、国の内外を問わずその美的評価は高く認められているが、日常着としての着装姿は殆ど目にする事はなくなり、フォーマルとしての役割の方が大きく伺える。なじみの少ない人にはいささか窮屈な趣きがあるためか、冠婚葬祭にしても洋装に押され気味である。しかし、最近、ニュー着物とよばれる。新しい感覚で着用する着物が店頭をにぎわせるようになってきた。本来、ニュー着物とは昭和25年頃、二部式で機能的なものをとすることで田中千代氏¹の提唱で作られたものが発端であるが、最近のニュー着物はアパレルデザイナーが作品を発表したり、レトロブームと相まって、大正時代のロマンティックな(大正ロマンの)イメージを取り入れた配色が独特のもの、帯の結びかたが異なったものなど、若者を対象に販売されている。このように、和服にもファッションの波が押し寄せてきて日本独自の伝統的服装の革新が成されようとしているが、着用者の意識として和服をどの様にとらえているか興味のあるところである。そこで、和服を着装する可能性の高い成人式以前の女性を対象に、和服と洋服に対する意識を通して、この両者の嗜好の

関連性を明らかにするために、調査を実施した。

調査概要

調査概要は table 1 に示すとおりで、6学科(被服, 家政, 英文, 国文, 教育, 体育)の女子短大1年生308名を対象に調査を行った。調査内容は①～④までの和服についての感覚的な意識調査と14枚の振袖のスライド写真の17形容詞対語による視覚的イメージ調査の2部形式によって行った。

尚, サンプルの振袖写真の選択に当たっては、86～88年の和装雑誌「美しい着物」に掲載された振袖と87～88年の市場のパンフレットの中から判定し易いように、立位で前方を向いたもの34枚を選出し、予備調査を経て14枚を選んだ。

分析方法

分析方法については fig 1 に示すが今回は各項目の単純集計, クロス集計を行い, それぞれの関連について検討を行ったのでそれについて報告する。尚, 集計に当たっては大阪大学大型計算機センターのSPSSを使用した。

Table 1 調査概要

調査対象：女子短大1年生(6学科)308名

有効解答者292名、解答率94.8%

調査期間：1988年10月7日～10月24日

調査項目：和服の感覚的調査

① 和服のイメージ	1項目
② 和服の着用意識	20項目
③ 洋服の嗜好性	10項目
④ 性格行動	15項目

和服の視覚的調査

⑤ 振袖のスライドによるイメージ調査	17項目
--------------------	------

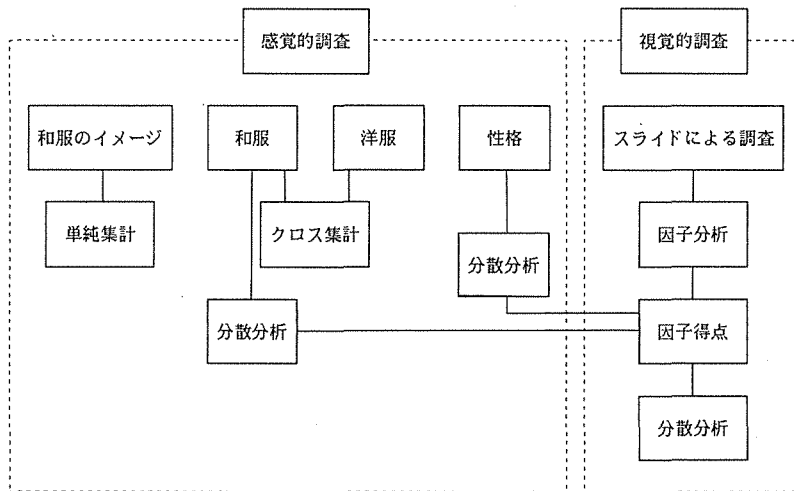


Fig. 1 分析方法

結果および考察

1) 和服のイメージ

「和服と言えば何を思い浮かべますか」という質問に対して自由解答方式で答えてもらった結果を table 2 に示す。これによると、和服のイメージは、「振袖」など直接和服と結び付けた人が25.7%あり、「成人式」などの行事を挙げた人が23.3%で、さらに人間像、時代、地域、イメージ、習い事などいずれにしても日本という枠の中から切り放せない存在として感じていることが伺えるが、和服を好ましいものとして受け取っていることも興味深い。

Table 2 和服のイメージ

項目	内容	集計(%)
着物	着物 振袖	25.7
行事	成人式 結婚式 正月 冠婚葬祭 初詣 見合いなど	23.3
人間像	日本女性 大和撫子 しっとり美人 奥様 舞子 芸者 和服美人 おばあちゃん 和由布子など	15.4
時代・地域	日本美 日本の伝統 日本庭園 京都 平安時代 校倉	10.6
イメージ	上品 古風 高価 女らしさ 清楚 優しい しとやか 日本人らしさ 純日本風 しなやか	6.5
習い事	華道 茶道 琴 日舞 師匠	6.2
その他	扇子 時代劇 結い髪 浴衣 西陣織など	12.3

2) 和服について

和服に対する意識についての単純集計結果を fig. 2 に示す。これによると、「機会があれば和服を着たい」という人がややを含めて89.7%あり、「街で和服を着ている人を見ると目がとまる」という人はややを含めて93.5%で、「結婚する時ある程度の和服を持って行きたい」とする人が78.5%となっている。これらから、和服に対する意識はかなり強く、和服に対して肯定的であることがわかる。しかし、「和服を選ぶときは親の意見に従う」が67.8%、「どんな着物が似合うかわからない」が82.8%で、和服に対する対応が低く、被験者が成人式前であることも関係してか馴染みの薄さも伺えた。さらには、「和服を買うのなら洋服を買いたい」という人が84.2%あることから、和服は衣生活において非日常性の衣服として捉えられていると考えられる。

このような意識の中、嗜好性を見ると、ややを含め派手な着物が好きな人が37.3%に対して、渋い着物が好きな人が75.0%とより多く好まれている。ニュー着物についてはややを含めて着てみたいとする人が56.5%であるが、従来の着物の方が好きであるとする人が69.1%と多く、伝統的な和服に対する評価の方がやや高いことが伺える。

3) 洋服について

洋服に対する意識についての単純集計結果を fig. 3 に示す。おしゃれをするのは面倒に思うという人はややを含め17.5%、服装でイメージチェンジを楽しむのが好きであるという人はややを含め69.9%、たくさんの洋服を見てから買うことが多いでは89.7%の人が肯定していることから、洋服に対する興味も深く積極的行動が伺える。また、嗜好についてははっきりとした色や原職の洋服が好きな人はややを含め50.6%で、さらに、柄物に対する好みは少なく(14%)、自分の好みは派手であるという人もややを含めて22.3%であることから派手に見える色や柄はあまり好まれていないと考えられる。

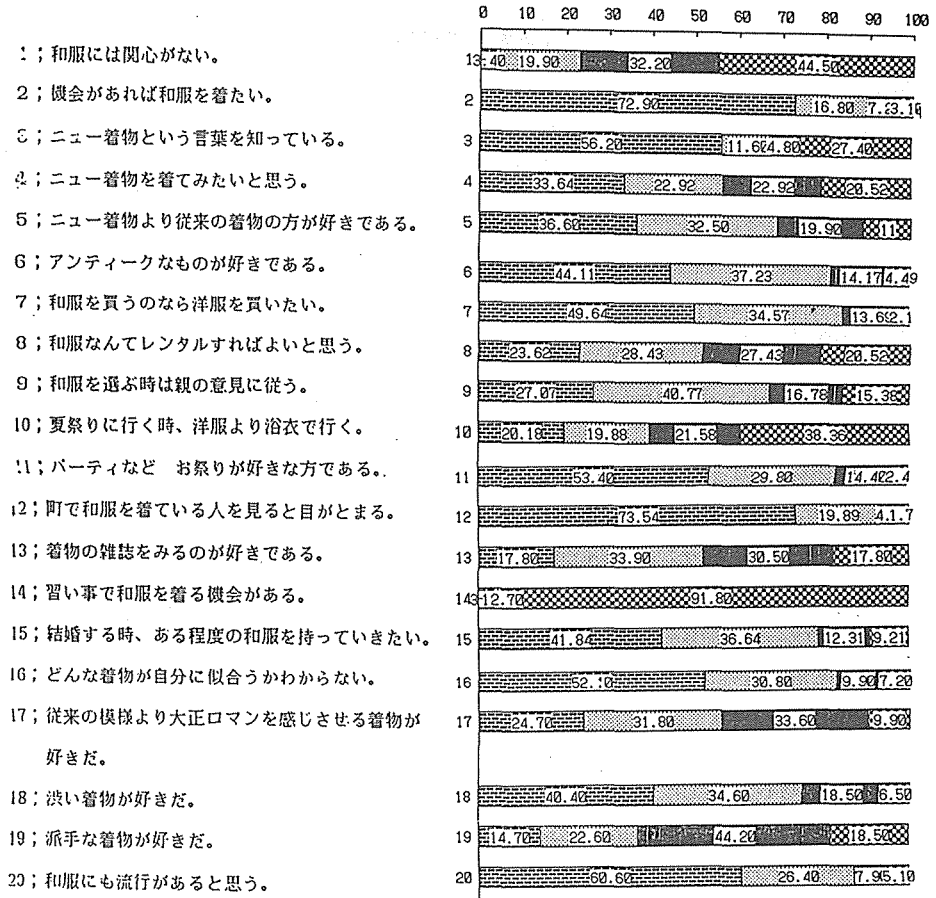


Fig. 2 和服についての意識の単純集計結果

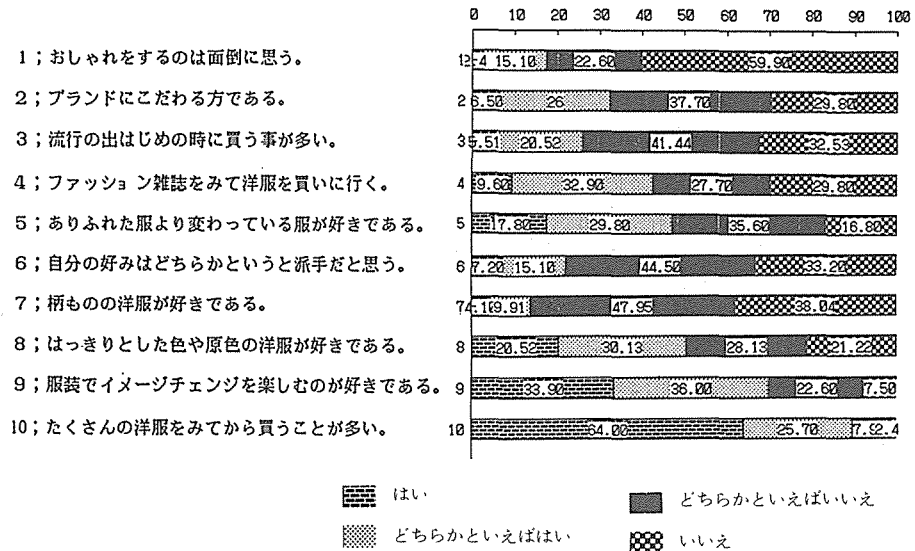


Fig. 3 洋服についての意識の単純集計結果

4) 和服と洋服の嗜好に対する関連性

次に和服に対する着用意識と洋服の嗜好性の関係を fig. 4~9 に示す。

fig. 4 は「機会があれば和服を着用したい」と洋服に対する「服装でイメージチェンジを楽しむのが好き」との関係を示したものであるが、和服を着たくないという人は服装でイメージチェンジを楽しむという人がなかったのに対して、和服を着用したいという人は服装でイメージチェンジを楽しむのが好きな人が多いことから、和服、洋服に関わりなく装うこととしての興味の多さが影響するものと考えられる。

fig. 5 「派手な着物が好き」と「服装でイメージチェンジを楽しむのが好き」との関係を示したものであるが、派手な着物が好きという人ほど服装でイメージチェンジを楽しむのが好きな傾向にあるといえる。

fig. 6 は「派手な着物が好き」と「洋服の好みは派手」との関係を示したものであるが、派手な着物が好きという人ほど洋服の好みも派手であり、反対に派手な着物を好まない人は洋服も派手なものを好まない傾向がみられた。このことから意識として和服の好みについては洋服の好みの尺度で考えていることが、推測される。

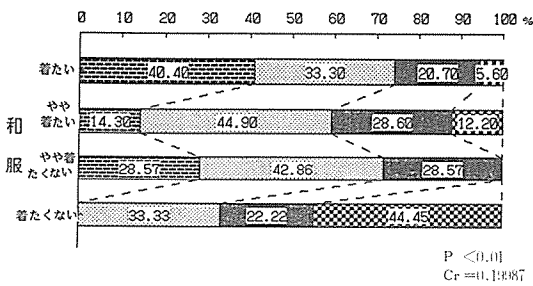


Fig. 4 「機会があれば和服を着用したい」と「服装でイメージチェンジを楽しむのが好き」

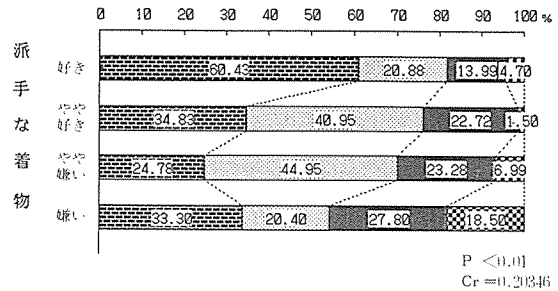


Fig. 5 「派手な着物が好き」と「服装でイメージチェンジを楽しむのが好き」

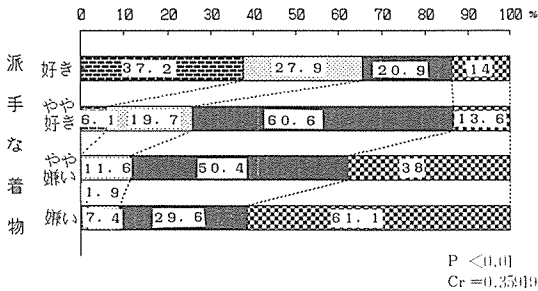


Fig. 6 「派手な着物が好き」と「洋服の好みは派手なものが好き」

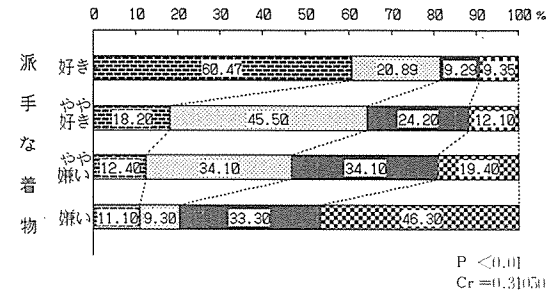


Fig. 7 「派手な着物が好き」と「はっきりした色や原色の洋服が好き」

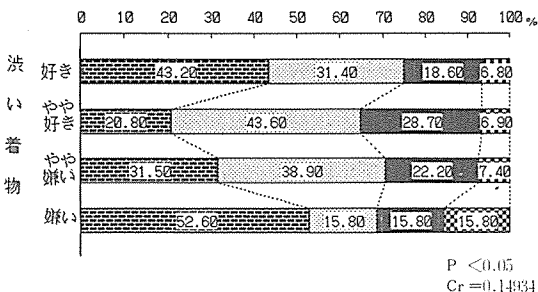


Fig. 8 「洗いた着物が好き」と「服装でイメージチェンジを楽しむのが好き」

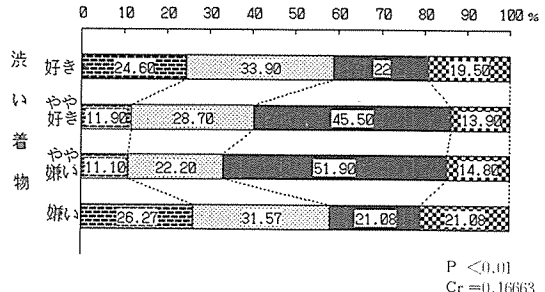


Fig. 9 「洗いた着物が好き」と「ありふれた服より変わっている服が好き」

fig. 7 は「派手な着物が好き」と「はっきりとした色や原色の洋服が好き」との関係を示したものであるが、派手な着物が好きという人ほど洋服に対する好みとして、はっきりとした色や原色のものが好きになることがわかる。ここでも洋服の好みの尺度で和服を考えていることが伺える。

次に、fig. 8 は「洗いで着物が好き」と「服装でイメージチェンジを楽しむのが好き」との関係を示したものであるが、洗いで着物を嫌う人のほうが服装でイメージチェンジを楽しむのが好きという人が多いが、洗いで着物が好きという人も服装でイメージチェンジを楽しむのが好きという人が多く、好きか嫌いかはっきりしている人の方が服装に対して興味も高いことが伺える。

fig. 9 は「洗いで着物が好き」と「ありふれた服より変わっている服が好き」との関係を示したものであるが、洗いで着物を好む人も好まない人も同じ様な傾向を示す。この『洗い』という感覚は、一般的に『派手』に対応して使われる『地味』ではなく、『洗い』という感覚にファッション性の高い要素が含まれていることが伺え、fig. 8 でも述べた通り、洗いで着物に対する反応の鋭い好きか嫌いかはっきりしている人の方が服装に対する興味が高いと考えられる。

以上のことから、和服と洋服の嗜好は同傾向で現われていることが認められた。

5) スライドによる振袖のイメージについて

次に、スライドによる調査結果であるが、14枚の振袖の中で比較的好まれた着物と好まれなかった着物のイメージプロフィールを fig. 10, 11 に示す。

これによると、好まれた着物 (fig. 10) はプロフィールの中心軸に近く、きわだった特徴がみられないが上品なイメージを受け、反対に嫌われた着物 (fig. 11) に対しては大胆な、派手な、個性的な、はっきりした、激しいなど刺激的なイメージを強く受けていることがわかる。

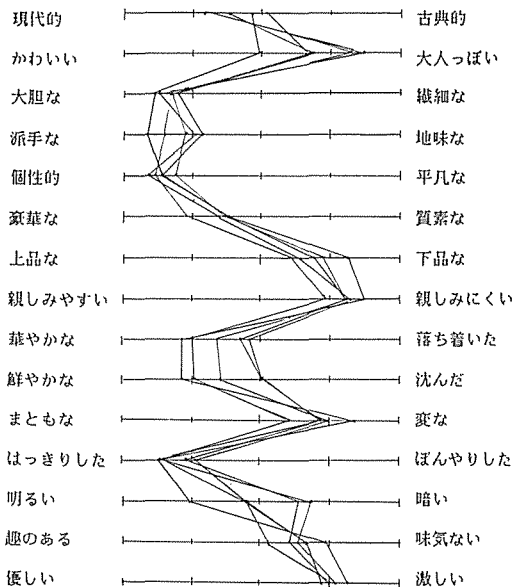


Fig. 10 好まれた着物のイメージプロフィール

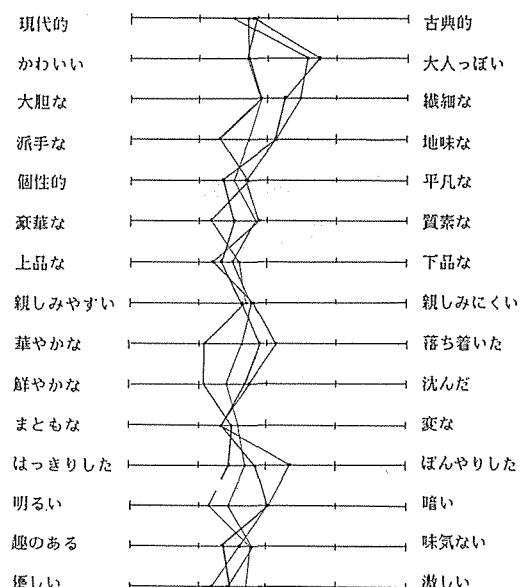


Fig. 11 好まれなかった着物のイメージプロフィール

6) 和服の嗜好性

スライドによる調査の中から、好まれた中から振袖K、好まれなかった中から振袖Fを選び、この振袖の嗜好性と和服に対する意識との関係を fig. 12~14 に示す。

fig. 12 は、「大正ロマン風の着物が好き」と振袖Kに対する嗜好の関係であるが、この振袖はうぐいす色とえんじのぼかしの地に梅の花や亀甲、のしめなどが散る模様で古典的な模様の中にも大正ロマン風の押しえた色使いがみられる。このことから大正ロマン風のものが好きという人には好まれている傾向にある。

さらに fig. 13 に示すように、この振袖Kと「洗いで着物が好き」との関係からも、洗いで着物が好きな人からも好まれていることがわかる。

fig. 14 は振袖Fであるが、この振袖は松紋にみられる三階松や桔梗を図案化した総絞りの着物で、赤、黄色、柿色、緑など、多彩色で染め分けられているものである。この着物は「大正ロマン」とは程遠く、大正ロマン風の着物が好きという人にはあまり好まれていない。これらから、和服に対する経験が浅いと考えられる被験者たちの和服に対する色彩意識と、スライドでの嗜好は一致しているといえる。

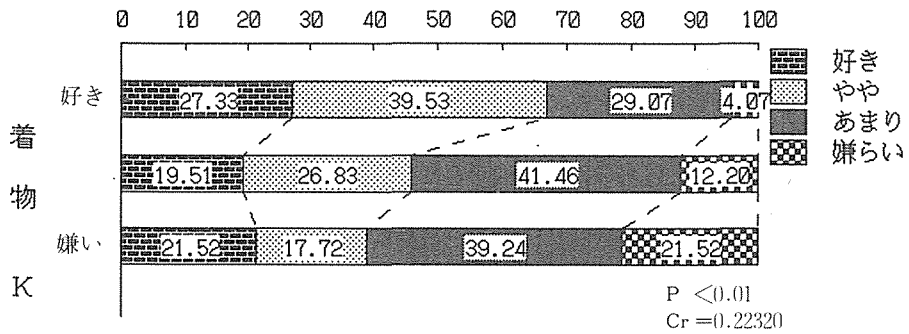


Fig. 12 着物Kに対する嗜好と「大正ロマンの着物が好き」

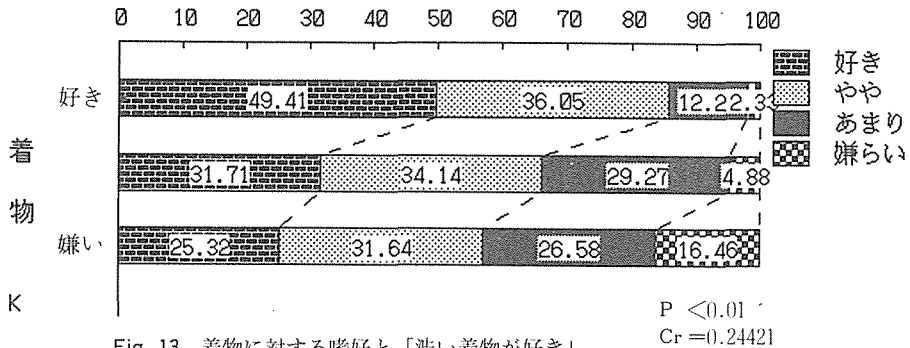


Fig. 13 着物に対する嗜好と「洗いで着物が好き」

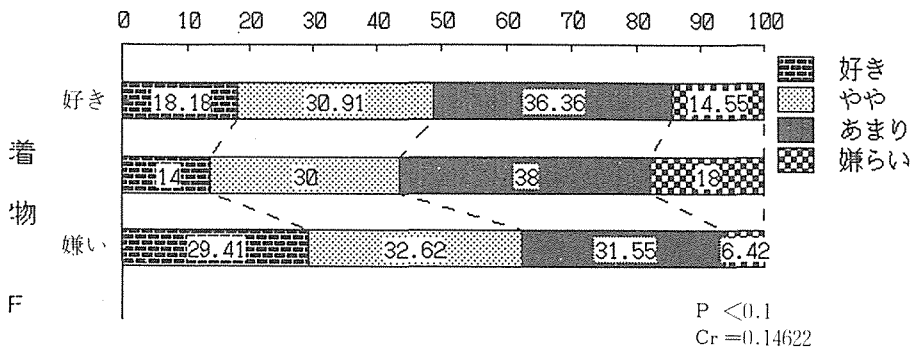


Fig. 14 着物Fに対する嗜好と「大正ロマンの着物が好き」

ま と め

- ① 和服に対するイメージとしては、成人式や結婚式など慶事の行事や日本という国の伝統として受け入れていることが認められた。また、窮屈、面倒というマイナスのイメージよりも、上品、清楚、しとやかと好ましいとするイメージの方が高く、和服に対する憧れのようなものが感じ取れた。
- ② 和服に対する感心は高く、機会があれば着用したいと興味を示すが、その反面、現実面での対応が低く、自分では選べない、和服を買うのなら洋服がほしいなどと答える人も多く、日常の衣生活において必要性の薄さや着用経験の少なさが伺えた。さらには、70%近くの人たちがニュー着物より従来の着物が好きだと言っているにもかかわらず、好まれたものはいわゆるニュー着物に属する大正ロマン風のものであったことは、成人式前でもあり、被験者の、和服に対する認識の不十分さが伺えた。
- ③ 一般的に和服のなかでも、振袖については特に色彩が豊かで豪華なものに価値が高いとされていた。しかし、スライドによる調査結果では、金色に輝くものや大柄のもの、さらに大胆な色使いのものは好まれなかった。それに反して、好まれたものは色使いがソフトで色彩の抑えられたものであった。

又、洋服の嗜好が渋いものが好きな人は、和服も渋いものを好むなど、色彩嗜好は一致し、洋服の嗜好を基準にして和服を選ぶのではないかと推測される。ニュー着物の中でも、一見地味にさえ見られる、大正ロマン風の落ち着いたある渋い色彩は、若い女性にとって魅力のあるものであり、さらに洋服感覚という面から、着装の変化を楽しめる存在として期待できるのではないだろうか。

これらを基礎に、さらに和服に対する概念を掘り下げ、伝統衣服に対する意識、や社会的規範の多い和服については次報に譲りたい。

末筆ながら、本論文をまとめるのに際してご指導賜りました南日朋子教授、ならびに大阪大学大型計算機センター指導員・梅花短期大学家本修教授に謝意を表します。

文 献

1. 田中千代：服飾辞典，p. 621 同文書院 1985

(1989年9月27日受理)